

アメリカにおける金融制度改革の歴史的展開

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学社会科学研究所 公開日: 2013-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 仁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15539

アメリカにおける金融制度改革の歴史的展開

高 木 仁

1990年代前半、アメリカで銀行産業衰退論争が戦われ、衰退否定論が勝利した。近年におけるアメリカ金融制度改革の流れも、その影響を受けているわが国の改革の動きも、中長期的にみればこうした傾向を、ともに示している。

日米とも、全金融機関産業との対比で長期間にわたり観察すると、銀行は相対的地位の低下が著しい。例えば、第2次世界大戦が終わった1945年にアメリカの銀行は、全金融機関の資産（貸付・投資など）のうちシェア50%を占めていたが、最近では20%程度に激減している。代わりにシェアが伸びているのが、民間年金基金、金融会社、MMFを含む投資信託など非銀行機関であることから、一部で銀行産業衰退論が主張された。

これに対し、長期的に観察すれば新しいタイプの金融機関と金融商品の種類が増えているか

ら、全金融機関産業の資産に占める銀行産業の資産シェアは、低下するのが当然であると、衰退否定論が主張された。また、衰退論が金融機関の資産に着目しているのに対し、収益に目を向ければ事情は違ってくる。銀行を含む金融機関が、総合的な金融サービス提供に踏み切り、伝統的な預金・貸付業務のウェイトを減らしている事実は否定できない。日米における金融制度改革の動きは、このような長期的ないし構造的な変化を土台に置いて、観察・分析されるべきだろう。